

馬を走らせ花をみる 馬を降りて花をみる

北 田 健

東京都文京区立音羽中学校

始めに

先日理科教育のある会合で偶然に田中先生にお会いすることができ、先生のご紹介で今この原稿を執筆しております。まさか自分が母校の北里大学でこのような機会をいただけるとは思っておりませんでした。この出会いに感謝しております。さて私が平成15年度に北里大学を卒業し、17年の時が流れました。これまでに私が経験してきたこと、そこで感じたことをここに書かせていただきます。参考にはならないかも知れませんが、私と同じく教職を希望される学生の皆様のお役に少しでも立てれば幸いです。

やっぱり中学理科は楽しい

初任校での高島勇二校長先生（元全国中学校理科教育研究会会長）との出会いが私の教師人生に大きな影響を与えました。当初、私は高等学校を希望しており、初めての面接でも率直にその事を伝えるような生意気な新任者でした。しかし、高島先生はそんな私に中学校理科の楽しさを教えてくださいました。普段の授業についてのアドバイスはもちろんのこと、ベテランの先生の授業に1年間TT（ティームティーチング）のアシスタントとしてつけていただき授業の進め方を学ぶ貴重な機会をくださいました。また放課後に一緒にユージオメーターを自作したのは良いものの、爆発して理科室の天井をへこませてしまったり、薄める前の塩酸に水酸化ナトリウムを直接入れると食塩が結晶で現れるらしいと試してみたり、と悪巧みをしたのも今は良い思い出です。（皆さんは安易に真似しないように……。ちなみに塩酸に直接BTB溶液を入れると赤色になります。）そして、初任にしていきなり独自の授業を展開しようとした無謀な私に「教科書は、理科教師の先輩方が今まで地道に作り上げたものだから内容をしっかり理解して3年分の授業を一通りしてから取り組みなさい。」とアドバイスいただきました。この時のアドバイスとその経験が今も私の授業の基礎として生きています。また「面白いところに行こう」とのお誘いのもと、区の教育センターが主催する夏休みの科学教室にお誘いいただきました。理科教員と

しては恥ずかしい話、それまで中高と部活動にかまけており、殆ど実験教室など体験する機会を持っていませんでした。区内の理科好きの生徒たちと共に実験に参加し、私も一緒に勉強をさせていただきました。また、実験教室後に講師の先生に教えていただいた水素爆発の三徳実験器や、塩化アンモニウムの再結晶実験などは今でも私の力強い武器になっています。そして次の区に異動するまで自分自身もカエルの解剖や化学変化の爆発実験など講師として参加させていただく機会にも恵まれました。様々な先生方に講義を見ていただくことで生徒への言葉がけや授業展開など多くのアドバイスをいただくことができました。

翌年の夏休み、また「けんちゃ〜ん、面白いところに行こう！！」と言われるがまま富士の麓まで連れ出されました。新たな試みとして全国の中学生のために開設された「創造性の育成塾」の第1回目でした。試しに1日見学させてもらうとのことでしたが、急ぎょYシャツと下着を購入するように言われ10日間ほど軟禁状態となりました。（ご本人は「じゃ、帰るね」と東京へ帰っていきましたが・・・）ノーベル賞受賞者の先生や、研究者の方々のお話を聞かせていただき、また中学理科研究のそうそうたる先生方の授業を見学し話す機会をいただき夢のような時間を過ごしました。数年後、某サングラスの方が深夜番組の企画で行っていたコンテストを参考にさせていただき、「パスタでブリッジ」という授業を企画し講師として参加させていただきましたが、さすが理科好きの子供たちの発想の豊かさに脱帽しました。

普段の授業でも理科をやる上でチャレンジすることが大切です。栄養教諭の先生と協力し、イカの解剖と調理実習を同時におこなったり、校医さんに授業に参加していただき、広島の動物園から頭骨標本をお借りして、人間の歯並びと動物の歯のつくりと食性について考える授業を行ったりしました。自分が面白いと興味を持ったことを紹介すると生徒の目の輝きが違います。また区の教育研究員として先輩の諸先生方とご一緒させていただき教材研究のイロハを教えていただきました。特に東京都中学校理科研究会の研究員をさせていただいた際には、ハイポ（チオ硫酸ナトリウム）を用いた火成岩の成因についての実験。記録タイマーの改良についての研究と先輩や同年代の仲間と夢中になって研究しました。今でもこのときのメンバーとアサリ会（阿佐ヶ谷で理科を学ぶ会）を立ち上げ月に1度、理科についての研究報告会と、その後の懇親会を今現在も続けています。高島先生から始まった初任校での様々な出会いがその後、都の教育研究員や開発委員など今でも続く私の教員人生に繋がっていきました。本当に感謝しかありません。

よく言われることですが、確かに理科は実験の準備が大変です。そして中学校理科は物化生地と幅広く扱わなければいけません。しかし、自分が興味を持ち、楽しいと思ったことは必ず生徒に伝わります。逆によく研究した分野は、自分の専門よりも上手くいくことがあるので不思議です。そして生徒が驚き喜ぶ姿、目を輝かせて嬉しそうにしている姿を見ていると「やっぱり中学理科は面白い。」と思うので

す。先日、私の理科の授業を受けた生徒がわざわざ異動した学校に訪ねてきました。3年生の時に受けた宇宙の授業が忘れられず自分も理科教師になりたいというのです。ああ今まで頑張ってきて良かったなと思えた瞬間でした。教師は生徒の人生に大きな影響を与えるやりがいのある仕事です。皆さんも理科好きの人がそろっていると思います。未来ある生徒達に、理科の楽しさを伝えられるのは理科教師だけです。ぜひ皆さんの中から多くの方が教壇に立ってくれることを期待しています。

私が教師を目指すまで

父が中学校理科教師であったこともあり、良くも悪くも他の方より教師という職業は身近なものだったと思います。私の出身は東京とは言えあきる野市という自然豊かな環境(他県の友達が遊びに来た時にここは本当に東京か?と言われました。)の中で、小さいときから川遊び魚釣りや、登山、キャンプ、と沢山の自然体験をさせてもらいました。また、野球、剣道、地元の農村歌舞伎と活動してきたことは、自分の素地になっています。自分が子供をもって今思うのは両親が意図的に様々な体験をさせてくれたのだなということです。しかし、私が小学校高学年・中学・高校・大学と進むにつれ、父が持病の片頭痛で学校を休むことが多くなってきました。どうしてしまったのかと思春期の私は反発心もあり、反抗してしまうことも多くありました。のちに知り合った父の元同僚の先生は「とても一生懸命にご指導されていましたよ」と当時の学校での父の様子を教えてくださいました。今その当時の父と同じような年齢に差し掛かり思うことが沢山ありますが、父は学校の中で責任を感じその責任を果たそうと足掻いていたのだと思います。そして私が大学生の時に鬱病により休職、そして一時復帰するも最終的には退職することとなりました。苦しみの中、思い悩みながらも私たち兄弟のために仕事を続け私たちを育ててくれた父、また明るく家庭を保った母の力には感謝してもしきれません。しかし、大学に入る頃には私は心の中に、教師だけにはなるまいとの思いを強く持つようになっていました。

それでも教職へ

そんな私の「教師にはなるまい」との思いを変えたのはやはり人との関わりでした。大学1年生の頃に母校の剣道部で顧問の先生が残念ながらお亡くなりになったとの連絡が入りました。私が高校3年生の時に主顧問になられた先生で新生剣道部が走り出した矢先の突然の訃報に本当に残念な思いを抱きました。その後、剣道の専門の先生がいなくなり、新しく顧問になられたのは偶然にも高校2・3年の担任としてお世話になった野沢先生でした。私の状況を知ってか知らずか、外部指導員として声をかけていただきました。私の都合上、長期休業中のみではありますが、指導にあたり練習に参加し一緒に汗を流しました。短い稽古時間でしたが、後輩と共に真剣に取り組みました。結果は残念ながら支部大会であと一步のところまで都大会出場を逃すという悔しい思いをしました。しかし、この年

から開始された都大会Ⅱ部（敗者復活戦）では見事に優勝することができました。結果を残し喜ぶ後輩の姿に私自身が共に感動し大きな喜びを感じました。そして、人に教える仕事に就きたいと本格的に教師を目指す決意を固めたのです。

初任校で ～生徒との向き合い方～

私が初めて勤務したのは東京の区部でも端に位置し、周りには森や畑が点在する長閑な環境の学校でした。私が赴任した当時は先生方が協力し生徒に寄り添う指導で学校を立て直した頃でした。この学校で私は2年間の副担任と5年間の担任を経験しました。様々な先生方にお世話になりましたが、特に公私にわたり大変お世話になったのが平良木先生です。自分の今までの失敗談などを生徒に気さくに話す楽しい先生でした。そして、初めてご指導していただいたことを今も思い出します。採用1年目で右も左もわからない、ある日、先生のクラスと一緒に掃除をしていました。そしてその日の放課後「北田君、それじゃだめだよ。生徒と一緒に活動しなくちゃ。」と指摘していただきました。私としては全体を見渡し生徒がしっかりと清掃をしているか監督しているつもりだったのでなぜだろうと思ひ、失礼ながら平良木先生の様子を観察してみることにしました。平良木先生は生徒と一緒に清掃する中で指示をするだけでなく一人一人の行動に対して「ありがとうね」「助かるよ」と感謝の言葉や認める声かけをされていたのです。ただ管理をして掃除を行わせることだけが目的ではなく、生徒と共に活動することで生徒を励まし認め導いていく。生徒と共にある指導を目の当たりにしたのです。また、本当に必要なときには「本当にそれでいいのか」と熱く語るシーンも私の心に残っています。生徒も、自分たちのことを一緒に考え認めてくれる先生だからこそ心に響く物があったのだと思います。今でも私自身、平良木先生のような「そうだよな」と生徒の共感を呼ぶ指導を目標にしています。生徒と共にあり一人一人の努力や変容を認めるチャンスを見逃さない。そんな関わりを持っていきたいものです。

この学校では教員集団としての学年についても大きな影響を受けました。「学年は家族」という考えです。「教員にもそれぞれの役割があるお父さん、お母さんはもちろんおじいちゃんやおばあちゃんそしておじさんおばさんだって必要だ。若い時は兄貴としてどんな役割があるか考えるといい。」とアドバイスをうけました。この学年は2年生からの参加でしたが、この考えの下、教員同士が得意な部分を活かし支え合う関係を作りました。そして、チームとして生徒のために動く学年となりました。課題を抱えた生徒も多数いましたが、生徒が安心して活動し、お互いに認めあう雰囲気が生まれていきました。それは生徒に対して、それぞれの先生が色々な場面で関わり、多様な見方、認め方ができていたからだだと思います。今でも私はこの時の家族のような学年を作っていくことを目標にしています。

学校では教科や担任の他に必ず分掌を任せられます。そして、今も大きな影響を受けたの

が特別支援コーディネータの経験です。この時の研修や試行錯誤が私自身に多くの発見をさせてくれました。特に発達障害についての理解が深まるにつれ、それまで、「反抗的な生徒」「指導の対象」と私が判断していた生徒も、実は学校という環境の中で困っている生徒なのではないかという気付きに繋がっていきました。私自身の考えが大きく変わった瞬間でした。そして後悔したのが初担任の際に授業に入れなくなった生徒のことでした。最初、元気よく学校に登校してきていましたが、次第に登校しぶりが続くようになり、3年生の時には給食だけを食べてくるような生活が続きました。ある日、別室で彼の行いを指導している際に、彼は激高し私の胸を殴りました。私を殴ったあと何とも言えない表情で部屋を飛び出していきました。今思えば、指導の中でその生徒の逃げ場をふさぎ追い詰めてしまったのです。彼の表面上の言動にばかり気を取られ、何とかその行為を直さなければならぬ、止めさせなければならぬとの一心で厳しく追い詰めるような指導になってしまっていたのだと思います。自分が思うように上手くいかない、頑張っても出来ない、自分について思い悩む思春期という時期だからこそ反抗的な行動をとってしまう。正論を敷き詰めた理詰めの指導ではこの心のもやもやは埋められません。教師はその生徒の為に行動を正すのはもちろんですが、その裏にある生徒の気持ちも考えなければなりません。生徒が自分で正しい道を選択するためには、ただ厳しくルールを守らせるだけでなく、その生徒のつらさに寄り添っていく姿勢、「本当にそれでいいのか」と一緒に考える力が私に足りなかったのだと思います。

二校目で ～みんなで作る～

初めての異動を経験し驚いたのは、今まで学校のことなら何でも知っているという環境から全く分からない環境に急激に変化したことです。二校目の学校は東京の中心部にも近く1学年6クラスある大規模校でした。生徒指導のやり方も違えば、紙の置き場、ゴミ捨ての仕方まで本当に何もわかりません。「異動は最大の研修」という言葉がありますが正にその通りでした。そして、この学校で私は教師として試されることになったのです。

異動して2年目、ある生徒と出会いました。突然パニックになり走り出したり、非常ベルをならしたりと困った行動をする生徒でした。その都度、落ち着かせてから話を聞いていきました。すると人間関係で失敗してしまったときの自分でも止めることのできない心の葛藤や、人との関わりを求め注目を集めたい気持ちが原因であることが分かりました。問題が起こるたび気持ちの落ち着け方や行動の改善方法について話し合いました。全て解決できたわけではありませんが、彼とは徐々に信頼関係を築くことができていきました。そして2年生になり、周りの生徒との友人関係ができていくことで大きな問題を起こすことは少なくなっていきました。3年生では別の担任の先生のクラスへ変わりましたが、生徒と真剣に向き合えばその思いが通じると確信した出会いでした。しかし、成功体験からきた自分の過信がその後の学級崩壊を招くことになったのです。

学年が上がりいよいよ3学年という時です。学年の中でも先生方に信頼してもらい自分でも自信がついてきた中、ある生徒の担任を任されることになりました。その生徒は、事情により私立から転校してきた生徒で、思い付きで行動してしまい。突発的な行動が多く、生徒間や授業中のトラブル、不要物の持ち込みのなど多くの問題を抱えていました。今までの経験から、丁寧に対応していこうとしました。しかし、ほぼ毎日起こる問題と指導が入らない状況が続きました。そしてその対応に追われだんだんとクラスが上手く回らなくなっていきました。今思えば責任を感じ、自分のクラスをまとめなければとの思いが強くなりすぎ、心に余裕がなくなっていたのでしょう。問題が起こるたびに言うことを聞かせようと高圧的な指導を行い、そして周囲の生徒に対しても上手くいかない部分をぶつけてしまっていました。そんな状態で他の生徒へのフォローができるわけありません。生徒の方を見ていない、まさに地に足がついていない指導になっていました。クラスの生徒の「先生が言うことを聞かせられないのに僕たちには無理だよ」という諦めにも似た言葉が状況を物語っていました。その時には完全にクラスの生徒の信頼を失っていたのです。次第にクラスの生徒のイライラは私への反抗的な行動で表れていきました。不安の強い生徒は不登校になり、授業は荒れ、「どうせ自分たちのクラスは落ちこぼれクラス」と生徒たちに言わせてしまいました。卒業式の翌日、ロッカーに書かれた無数の落書きを消しながら何がいけなかったのか考え涙したのを思い出します。今振り返れば原因はクラスの生徒一人一人を大切にできなかったこと、個々の努力や気持ちに気づくことができなかったことです。そして生徒を型にはめ、クラスを綺麗に取り繕おうとした自分の浅はかな考えがそこにありました。この件について唯一の救いは、その生徒の保護者の協力が得られた点です。そしてスクールカウンセラーの方にその生徒に合った医療機関を紹介していただき、適切な対応をしていただきました。そうすることで、その生徒は徐々にではありますが落ち着いて取り組めることが増えていったのです。そして荒れた最後のホームルームで「お前ら静かにしろよ、先生の話はこれが最後だぞ」と言ったのも彼でした。その生徒が高校に入り部活動など自分の力を発揮して成長していったこと、そして後に大学に合格し進学することをわざわざ報告に来てくれたことは本当にうれしいことでした。一人の生徒に向き合うこと、保護者の方との協力、そして外部の機関を含めて適切な支援を提供することが大切だと気づかせてくれる出来事でした。

その次の年、自信を失い教職を続けられるのかと悩んでいましたが、新しく希望を与えてくれたのも生徒でした。新一年生を迎え、もう一度、一からやり直そうと丁寧さを心がけ生徒一人一人との関係作りに取り組みました。その中で真剣に私の話を聞き実行しようとする生徒の姿に心を打たれました。そして自分自身の心に余裕を持ち一人一人を大切にしたい関わりを持つことの大切さに気づくことができました。もう一度教師として頑張ってみよう気づいた事をためしてみようと思ったのです。そして、2年生の時に、一人の生徒を受け持つこととなりました。

その生徒は周囲に不快な思いをさせるコミュニケーションを取る（周囲が過剰に反応するため喜んで、注目され構われている、こうすると自分の思いが通ると誤学習をしてしまっていました。）、また授業中にパニックになり大声で叫びながら暴力的な行動をとってしまう状況が続いていました。1年生の際にはクラス全体にイライラした雰囲気があり他の問題も多く発生してしまう状況でした。そこで、まず私が取りかかったのが、その生徒にクールダウンの方法を教えること、またパニックから回復したところで根気強くふり返りを行うことでした。自分の思いに気付いたり、なぜ失敗してしまったのかをその生徒自身が少しでも理解できたりするように手助けしました。（最終的に分かったのは勉強が分かるようになりたい。友達と仲良くしたい。との思いが余りに強く、上手くいかないことが起こる度に過剰に反応してしまうということでした。）そして、そのうえで必要があれば謝罪の機会を設けました。最初は頑なに謝罪を拒んでいましたが、彼女自身の気持ちに共感すると共に相手の気持ちを一緒に考える事で少しずつではありますが謝罪できることが多くなりました。またクラスの全体では、生徒がストレスをため続けることなく活動できる雰囲気を作ることでした。一番心がけたのが担任である私自身が、その生徒だけでなくクラスの他の生徒にも声を荒らげず落ち着いて対応することでした。そして、それぞれの生徒が頑張ったことや協力してくれたことへの感謝を伝えていきました。クラスの雰囲気は大部分の普通の生徒がどう行動するかで決まります。どんな事が大切なのかその子達の努力を認め、過剰反応しないクラスを作っていました。また保護者への医療的なサポートと支援教育の必要性の説明も同時に行っていました。私の力不足もあり、上手くいかない部分も多々ありました。しかし、終了式の日に「このクラスのことは忘れないよ」と自然に生徒への言葉になっていました。“以前の失敗を繰り返さない”という強い思いが私の中で作用したのかも知れません。

3年を迎えるにあたって、来年も担任としてその生徒を担当しようと考えていたところ、校長先生から学年主任をやってくれないかとの打診を受けました。そして、担任には生活指導主任を担当されていたベテランの先生をあて、そのクラスのサポートをして欲しいとのことでした。私自身も担任だけの力では限界があると感じていました。学年を開始するにあたってチームで対応できるよう学年での体制を整えました。クールダウン時に手が回らなかった部分のフォロー、また外部機関やスクールカウンセラーとの連絡調整、保護者からの要望に対する学校側の調整などをコーディネータの先生と協力し分担を行いました。また区の通級学級との連携も始まりました。このチームとして問題に対応する体制ができていったことは大きな変化でした。

そして、学年全体でストレスにさらされてきた生徒たちには、自信をなくしている部分が見受けられました。そこで生徒に3年生としての誇りを持たせることを学年主任としての目標に据えました。運動会、修学旅行、学習発表会など、学年朝礼、練習とその都度ごとの目標を提案していきました。そして、叱咤激励は勿論できた事への評価を示し続けた

のです。色々と大変なこともありましたが最終的には無事卒業式を迎えることができました。最後に私が生徒に出した課題は、卒業式の呼名に対して顔を上げ大きな声で返事をするというものでした。その課題に生徒は一人一人自信をもって答えてくれました。私は我が儘を言って卒業証書授与の介添えをさせていただきましたが、本当に教師冥利につきる瞬間でした。

この3年間で感じたことは周囲の生徒の成長です。「なんで私たちだけこんな思いをするの？」から、状況を理解し「私たちだから対応できる」と気持ちが変わっていったことです。卒業遠足の際には、その生徒のために「私たちが一緒に班になる」と申し出て、心配する教員に対して「大丈夫だ」と逆に説得する場面も見られました。各ご家庭の協力もいただきながら楽しそうに班行動をするその生徒の姿が見られたことは私にとっても感慨深いものがありました。残念なのは、最後までその生徒の勉強ができるようになりたい、友達が欲しいとの思いと学校生活とのギャップを埋められず、共に悩むことしかできなかった事です。しかし、上手くいかない状況を、教師、生徒それぞれの立場でとらえ、自分に出来る事を考え問題に当たっていく、そんな学年になりました。

今思うこと

現任校では学年主任を任され2年目になります。

友達が欲しい。勉強ができるようになりたいができない。上手くやりたいけれど上手くいかない。親や周囲の価値観と現実のギャップ。自信の喪失。これまで紹介した事例は一部でしか無く、他にも多くの辛い思いをしている生徒の実態に触れてきました。本来、人はよりよく成長したいとの思いを持っているはずで、そして成功も失敗も含めて経験をする事で成長していきます。しかし、発達に問題を抱えていたり、家庭環境など、自分にはどうすることもできない事で失敗や上手くいかないことを経験し続けることで、気持ちが屈折したり無気力になってしまう生徒もいます。また否定されることが多くなり素直に人からの指摘を受け取れない心理状態に陥っている生徒も多くいます。では教師にできることは何なのでしょう。私はまず人間関係を築くこと、「君のことを見守っているよ」と安心できる場所が1つはあるのだと示すことだと思っています。「馬に水を飲ませることはできない」というイギリスのことわざがあります。いくら教師が良かれと思って話を進めようとしても自分を変えようとする人間本来の力が弱まっては何も始まりません。しかし、逆にその部分が変われば「馬が水を飲みたいと思えば止めても勝手に飲み始める」のです。人が頑張ろうと思うためには、最初に安心感が重要です。そしてその上で上手くいかない部分の解決方法を共に考え自己肯定感を身に付けさせていく事が大切だと思ふのです。

教師は責任のある仕事です。しかし、私自身の失敗は、その責任に押しつぶされ、一人でどうにかしなければと足掻くあまり、自分が上手くいかない焦りや苛立ちを生徒や周囲

に向けていたことです。本来取り除かなくてはいけない不安や焦りをばらまいていたのです。学校の教員である限り、集団をまとめるということがどうしても責任としてのしかかります。しかし、集団を見るあまり生徒個々の気持ちを置き去りにして無理にルールを守らせてもいつかは限界がきます。まずは教師自身の心の余裕を持つこと。その上で生徒の言動を広く受け止め、そして必要な指導を行う力が求められているのです。

簡単に解決できない問題が多くある状況だからこそ、これまでの経験を通して、私が大切にしている考えがあります。それは教師は生徒の行動に価値をつけることができる存在だということです。生徒は日々、様々な行動をします。頑張ったり努力したりしたときには、小さなことでもとらえて褒めていく。失敗したときや上手くいかなかったときにはその意味を考えさせ努力に意味をつける。生徒の一つ一つの行動に価値をつけることができるのです。この日々の生徒の行動に価値をつけ認めていくことが、彼らに自己肯定感を持たせ、自ら進んでいく力になるのです。生徒がこうなりたいと試行錯誤しながら努力して、成功や失敗を繰り返していく、そんな彼らを励まし共に歩んでいくのが教師なのだとは信じています。

最後に

初任校でお世話になった平良木先生が好きな言葉として中国で起こった文化大革命の時の落首「馬を走らせ花をみる、馬から降りて花をみる」という言葉を教えてくださいました。元は「走馬看花」中国の四字熟語で“大雑把にしか見ないこと”というのが意味だそうです。そしてその落首の意味は時代の流れに流されることなく一度、馬を下りてゆっくりと一つ一つの花をみようということなのでしょう。忙しい教師という仕事ですが、私も40を前にしてやっと馬から降りて花を見ようとする心の余裕が少しは持てるようになってきました。そして、今、一つ一つの花を見て大切に育てていきたい。そう強く思うようになりました。しかし、平良木先生は更に「でもね、私はどちらも大切だと思うんだ。時には馬を走らせ大きく全体を見渡すことも必要なんだよ」ともおっしゃっていました。一人一人の生徒を大切にみると同時に先生のように学校や学年全体を見渡し必要な部分を支える。私はいつこの境地に至ることができるのか、これから更に頑張っていかなければと思っています。

今学校現場は大きな変化の時期を迎えています。大変なことも沢山ありますがその分やりがいもあります。生徒一人一人の前向きな気持ちを応援し、生徒自らが最善の道を選び取っていけるよう生徒に寄り添っていく、そんな教師を目指し、共に頑張っていきたいです。